

# 火起こしの歴史

	10000年前	3000年前	2000年前	1200年前	800年前	400年前	100年前
	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	江戸
木をこすり合わせる		(もみぎり法) 棒を手で回す				舞ざりを使う	
石を打ち合わせて火花を起す							石と鉄の板を打ち合わせる

このほかに、ひもや弓を使った方法などもあります。

このほかに、石同士を打ち合わせた方法もあります。

# 火おこしの歴史

みなさんは、日頃の暮らしの中で「火」に出会うのはどんな時でしょう。夏の夜の花火、キャンプファイアー、あるいは台所のガスコンロの火。あまり多くは思いつきませんか。たき火のように屋外で火をたく機会がほとんどなくなってしまった今日では、「火」そのものに出会うチャンスはずいぶんと少なくなりました。

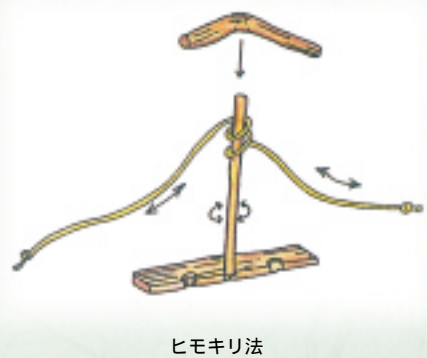
しかし、昔から、「火」は人類の生活になくてはならないものでした。暖をとるため、お湯を沸かしたり料理をするため、明かりを灯すため、そして害虫や危険なけだものから身を守るため、人類はさまざまな場面で「火」を頼りにしてきたのです。

では、まだマッチもライターもない頃、わたくしたちの祖先は、どのようにしてその「火」を得ていたのでしょうか。

ひとつの方法が、石と石、あるいは鉄と石を打ちつけて火花を散らすことによって、その火花から火をとるものです。この道具を「火打ち金」「火打ち石」といい、古くは奈良時代にはこの方法で「火」を得ていました。

もうひとつの方法は、摩擦による熱から火をおこす方法です。みなさん、手をこすり合わせてみてください。段々、熱くなってきますね。これが摩擦熱です。わたくしたちの祖先は、木と木をこすり合わせることで「火」を得ていました。この方法は、縄文時代までさかのぼることができます。

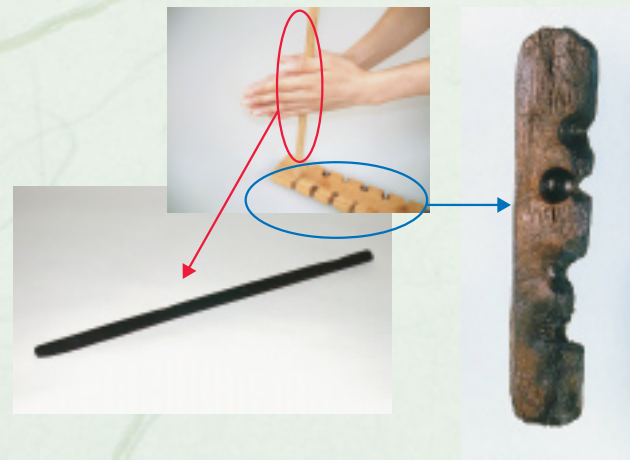
ここでは、火おこしの歴史を振り返るとともに、木を使った火おこしの方法をご紹介します。木を使った火おこしにはおもに以下の方法があります。



## 鳥取県内で見つかっている火起こしの道具



青谷町青谷上寺地遺跡で見つかった  
弥生時代の火起こし道具  
(棒をこすりつけた板)



福部村栗谷遺跡で見つかった  
古墳時代の火起こし道具

## 鳥取県埋蔵文化財センター

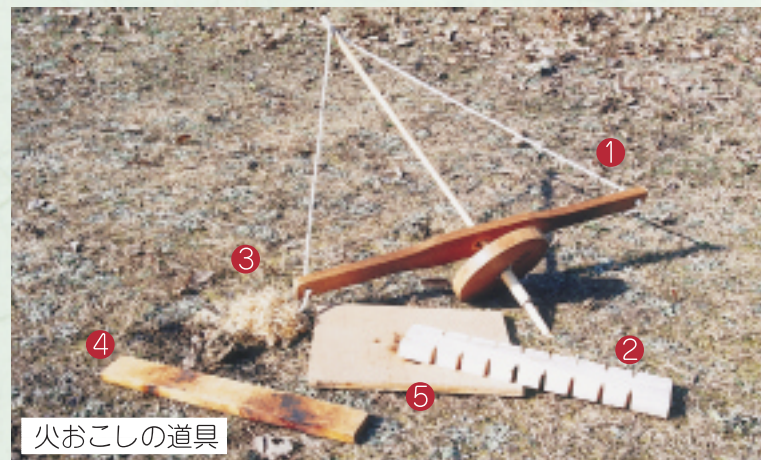
〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260  
TEL 0857-27-6711 FAX 0857-27-6712  
<http://www.pref.tottori.jp/maibun/>

# 舞割り法で火おこししちゃお!

ここで紹介する舞割り(まいぎり)は、もともとは穴を開けるために考えられたもので、火をおこすためにも使われるようになった道具です。  
木をこすり合わせる方法としては簡単で、早い人なら2分ほどで火がおきます。ぜひチャレンジして、火をおこしてみましょ。がんばってくださいね。

## 道具の名前

- 舞割り[はずみ車を使って回転力を高めます]
- 火きり臼(うす)[きりの先が回転して火がおこります]
- 「もぐさ」と「わら」[火だねを移して火を徐々に大きくします]
- 押さえ棒[火だねを移す「わら」を押さえるのに使います]
- 台板[舞割りの回転を安定させるために下に敷きます]



火おこしの道具

## 気をつけてね

- 髪の長い人は舞割りに髪を巻き込まないように。
- きりの回転に従って出てくる黒い粉の中に突然小さな火種が生まれます。粉は大切にしましょう。
- 煙の色の変化をよく観察しましょう。黄色く変わるとまもなく火がつきます。
- 粉の中にできた小さな火種がとても大切。息をゆっくり長く吹きかけて、少しずつ大きくします。
- わらが燃え上がったなら、すぐ水の入ったバケツに入れて消火しましょう。

## 火おこしの方法



足で火きり臼を固定し先端を切込みの根元におきます



きりの回転が始まり少しずつ早くなります



もぐさへ移った火を次にワラへ移して大きくします



弓を水平にしてひもの左右のバランスをとります



回転速度の上昇にしたがい粉と煙が出始めます



ワラの中のもぐさにある火種をゆっくり吹きます



弓を水平にしたままでひもにネジリをかけます



粉の中に小さな火種ができると白の粉を採取します



煙が少し黄色っぽくなると突然火が燃え上がります



ネジリのかかった状態で弓を下へ押します



火種にゆっくり息を吹きかけもぐさへ火を移します

**やったね！これであなたも火おこし名人、かな？**  
火をきちんと消したら、あと片付けもみんなで協力してきれいにしようね。